

立岩真也『自閉症連続体の時代』を読む

(『パブリッシャーズ・レビュー』2014年12月15日号)

堀田義太郎

本書は、広く自閉症連続体（スペクトラム）とされる状態に関する論争を通して、現代社会を捉え直し、望ましい社会を構想する本である。

自閉症連続体については「脳」の障害が原因だという説が一般的になっている。そして自閉症は脳の病気だという説は、当事者の人々にとっても朗報として受け入れられている。しかし他方で、この説に対しては「社会の問題」を見えなくする、という批判もある。本書は、脳の病気だという説とそれに対する批判のいずれにも理があるとして、脳の病気だという説が受容される背景を掘り下げる。

立岩氏によれば、脳の病気だという説の利点は当事者の生き辛さを軽減するのに役立つところにある。この説が受容されるのも、病や障害であると「証明」しなければ生き辛いからである。では、自閉症連続体の人々が生き辛いのはなぜか。その主要因は、自閉症連続体の人々が苦手とする「人間関係」に関わる仕事が大勢を占めるようになったことにある。そして立岩氏は、実は人間関係に関わる仕事が増加していること自体が、今の社会には『余計な』仕事を人にさせるしかないほど余裕があるということを示していると言う。つまり、「自閉症連続体の時代」とは社会全体として「余剰・余裕」がある時代である。

ここから本書は、だとすると、脳の病気だという説を当事者に受容させている背景そのものを変えることができるはずだと言う。それは、誰もが自分の能力や障害などを「証明」せずに、「理由・事情と関わりなく暮らせる」ような社会を作ることである。そして、理由や事情に関係なく生活を保障するシステムは、この「余剰がある時代」では十分実現可能である。

自閉症を切り口として望ましい社会構想に至る本書によって、読者は、たとえば、理由・事情に関わりなくしたくないことをせずに済むような社会が本当に成立するのかどうか、責任や義務と負担や苦痛の関係はどうなっているのかなど、あるべき社会のあり方を考える上で避けられない、根本的な問いに誘われるはずである。